

木漏れ陽

12月

平成30年12月3日 第54号
発行 佐賀市教育研究所
発行責任者 所長 松島正和

今年の一文字

平成 30 年も残すところあとひと月となりました。この時期になると、毎年、京都の清水寺で発表される「今年の漢字」が気になります。

この1年を表す一文字、今年は何になるのでしょうか。

平成 30 年という年を振り返ってみると、地震や台風などの災害、記録的な猛暑（酷暑）など、私たちをとりまく環境が大きく変化していることを痛感する災害が数多くありました。

そのような中、私にとっての大きな出来事は、新学習指導要領の移行期間が始まったことです。新学習指導要領の理念は、移行期間が始まった今でも、私にとっては「学習途上」の課題と言えます。

奥の深いこの課題に向き合うとき、いつも頭の中に浮かんでくる言葉があります。

「1時間の学びを、一生の学びにどうつなげるか」

これは、前任校の上司が家庭科の実践をする私に、1時間の重みを話してくださった時の言葉です。家庭科で身に付ける力は、子ども達の生活を支え、生涯に役立つものとなります。しかし、現実には、年間 55～60 時間という限られた時数の中で、豊かな学びを創り上げることが求められます。

家庭科に限ったことではありませんが、題材（単元）をどのように組み立て、1時間の授業をどのように仕組むのか、といった授業設計は時として苦しくはあるものの、大変やりがいのあるものです。

「1時間の学びを、一生の学びにつなげるために」～野菜のゆで方を通して、すべての野菜のゆで方を学ぶ～



例えば、5年生では「野菜をゆでる」という学習を行います。（教科書 P13）

子ども達は「野菜を上手にゆでて、おいしいほうれんそうのおひたしを作る」ことを目標に活動を進めます。作り上げたときの充実感に満ちた顔は、本当に素敵で、その表情からは、学習への満足感がうかがえます。

しかし、実生活においては「野菜」をゆでられるだけでは不十分であり、この段階では、子ども達の生涯を支える一生の学び（生きて働く知識・技能）につながっているとは言えません。

実は、本時における授業者のねらいは、右の図（教科書 P15）を頭の中に描かせることでした。そこで、まとめでは、対話を通して野菜を植物の部位としてとらえ直し、活動を振り返らせます。「野菜は茎と葉の部分でゆで方が違う」→「野菜は食べる部位によってゆで方が違う」→「他の部位はどのようにゆでればよいのか」という思考の流れを作り、全員で右の図を完成させました。



「1時間の学びを、一生の学びにつなげる」という視点は、新学習指導要領を理解するうえで、大きな手掛かりとなりうることを、私はこの授業で実感しました。今後は「一生の学びにつながる授業」の創造が求められるように思います。そういう意味で、私にとっての今年の漢字は「創」です。

（学校教育課 指導主事 平石実鈴）

平成30年度佐賀市教育研究発表会

- 1 目的 佐賀市の教育に関し、当面する教育課題やその対応等および教科等の研究について成果発表を行い市内の教職員の理解を深めるとともに、資質向上を図る機会とする。
- 2 期日 **平成31年 1月24日(木) 13:20~16:45 (受付13:00~13:20)**
- 3 会場 **佐賀市東与賀農村環境改善センター**
- 4 内容
 - (1) 開会・挨拶 13:20
 - (2) 教育研究所研究発表(大研修室) 13:30~15:20
 - ①教育研究所研究発表(課題研究部) 50分
 - ②教育研究所研究発表(児童生徒理解部) 50分
 - ※ 移動・休憩(10分)
 - (3) 個人研究発表(3会場に分かれて) 15:30~16:45

個人研究発表者			教科等
視聴覚室	山口 純平 教諭 (赤松小)		特別活動
	石丸 稚菜 教諭 (高木瀬小)		外国語活動
	江口 貴文 教諭 (高木瀬小)		算数科
大研修室	富永 美奈子 教諭 (鍋島小)		特別活動
	江頭 涉吾 教諭 (春日小)		社会科・総合
	井田 丈嗣 護教 (思斉小)		体育科
和室	中山 ももこ 教諭 (思斉小)		音楽科
	古賀 貴美子 教諭 (北川副小)		道徳科
	高野 晋輔 教諭 (北川副小)		国語科



佐賀市の若い先生を中心に、研修を深めたことを発表します。先生方の熱意を感じると同時に、これからの取組について多くのヒントをもらうこと請け合いです。興味のあるところだけでもいいので、できるだけ多くの先生に参加していただきたいと思います。
(教育研究所指導員 大久保美奈子)

児童・生徒の「自己有用感」を育む集団づくり

佐賀市教育研究所(児童生徒理解部)では、昨年度の研究主題「児童・生徒の自己有用感」を継承し、研究を進めています。今年度は小学校部会と中学校部会にそれぞれ5名の先生方が顧問の校長先生方の指導・助言を受け、自己有用感を高める学級づくりや授業づくりに取り組んでいます。前年度の実践に加え、個々の先生方が培われた技術や創意工夫を取り入れながらの実践です。

10月に文部科学省から公表された「平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」において、小中学校の不登校児童生徒数が過去最多になったと発表されました。小学校35,032人(0.54%)、中学校108,999人(3.25%)、前年度に比べ、小学校4,584人、中学校5,694人も増えています。佐賀県の公立学校においては、小学校226人(0.49%)、中学校788人(3.44%)、前年度に比べ、小学校が25人、中学校が43人増え、国と同じ傾向にあります。

平成28年9月に文部科学省から出された「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」では、「不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援」と「不登校が生じない魅力ある学校づくり」が求められています。「不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援」はチーム学校(管理職、教育相談担当、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、サポート相談員、学習支援員等)の支援や関係機関との積極的な連携による支援が必要になります。児童生徒理解部の研究は、学級づくりや授業づくりを土台に「不登校が生じない魅力ある学校づくり」に結びつく実践となっています。

その研究成果や課題等は佐賀市教育研究発表会において発表します。多くの先生方にご参加いただき、指導方法の工夫改善や個に応じた指導の充実に生かされることを期待しています。

(学校教育課 教育相談係 秀島正文)